

神宮寺石の謎に迫る!

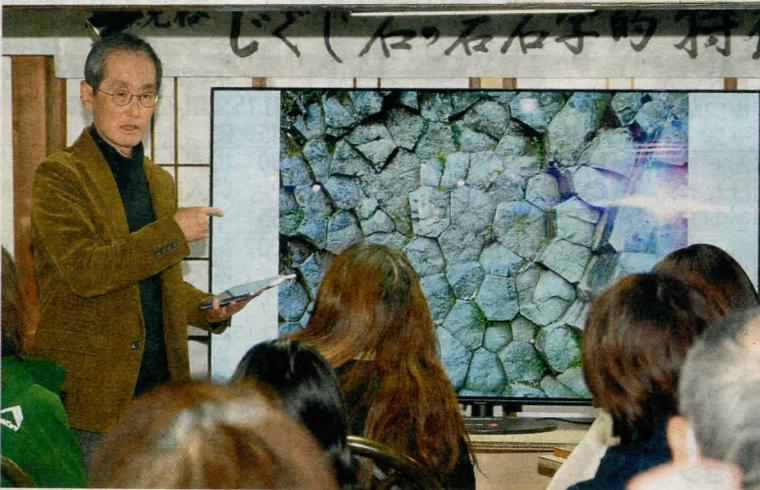
希少な岩石 名取教諭(富士見中)が特異性語る

昭和初期以前に諏訪市中洲神宮寺地区で産出した希少な岩石「神宮寺石」について、その特徴と謎に迫る講座が23日、諏訪大社上社本宮東参道沿いの柏屋カフェ&ギャラリーで開かれた。科学的な光を当てた学びは地元住民にとっても今回が初めてで、上社周辺まちづくり協

議会(小島実会長)が主催した。この石を調べ、特異性を明らかにした富士見中学校の名取克裕教諭「富士見町原の茶屋」が調査結果を示し、地殻活動、日本や諏訪盆地の成り立ちを易しくユーモアを交えて語った。

(日比野真由美)

上社周辺まちづくり協が講座



神宮寺石の特異性について話す名取克裕教諭

同石はかつて鳥居や石塔、石垣などに多用され、地元では「じぐじ石」と呼んでなじみ深い。岩体は目視で幅約100センチ、厚さ10センチほどしかなく、採石事業は昭和初期で終了。現在は入手できず希少性が高まっている。地学的にも「不思議」があり、地元研究者の間で長らく「玄武岩」が通説だったが2006年、名取教諭が「安山岩」であることを突き止めた。

一般的に山頂から噴出するが、山の山腹から出ている。盆地の中で活動した火山は他にない。地球規模の地殻活動の中で何らかの圧力がなくなり、押し上げられたか、自ら出たか」と考察した。

地殻活動の解説の中では、大規模な構造線が交わる場所に諏訪大社上社、牛伏寺など信仰の社があることに「昔の人は何か見えていたのかも」と不思議さも投げ掛けた。

「石はかつて鳥居や石塔、石垣などに多用され、地元では「じぐじ石」と呼んでなじみ深い。岩体は目視で幅約100センチ、厚さ10センチほどしかなく、採石事業は昭和初期で終了。現在は入手できず希少性が高まっている。地学的にも「不思議」があり、地元研究者の間で長らく「玄武岩」が通説だったが2006年、名取教諭が「安山岩」であることを突き止めた。

講座で名取教諭は、「下諏訪町和田峠の西餅屋でみられる岩石と組成も生成時期も同じ玄武岩とされていたが、西餅屋の岩の生成は170万年で諏訪盆地の大方を造った火

山岩より古い。対して神宮寺石は15万年前。諏訪盆地で一番の若造。しかもマグネシウムとカリウムの含有量が大きく違う」と決定的な違いを指摘。「通常、火成岩には含まれない特殊鉱物を含み、国内でも特徴的な石だと分かった」と新たな発見も披露した。

表出の仕方も珍しく、「一